

[寄稿]

「明治大学SDGsコーヒー」の挑戦

神保町の街づくりと途上国支援

この2月、明治大学オフィシャル・グッズのオンラインショップで、島田剛准教授の3年生のゼミ生が企画した「明治大学SDGsコーヒー」の販売が本数限定で開始される。この企画は、「コーヒーハンター」として知られる(株)ミカフェート(東京・神保町)の代表取締役社長、川島良彰氏の協力を得て実現した。その狙いと背景を島田准教授が語る。



明治大学
情報コミュニケーション学部 准教授
島田 剛

コロンビアの障がい者が生産

明治大学SDGsコーヒーは、コロンビアにおいて障がい者を雇用しながら高い品質のコーヒーを生産しているフェダール農園のコーヒー豆を使っている。きっかけは、川島氏による2019年9月のゼミでのセミナーだった。そのセミナーで、フェダール農園の障がい者の人たちが単に雇用されているだけではなく、川島氏の技術指導により技術を身につけ、役割を持って、より品質の高いコーヒーを生産していることを知ったことだ。そして、自分たちでも調べてみると、神保町にも同じように障がい者を雇用し、バリスタや焙煎士などの技術を習得し活躍している「ソーシャル・グッド・ロースターズ」というカフェがあること

も分かった。ゼミ生たちはこうした取り組みに強く共感し、自分たちでこの企画を進めてきた。

このコーヒーは、おいしいの一言に尽きる。一口飲むとプラムのような風味があり、同時に焙煎が浅めであることから爽やかな酸味を感じる。また、コーヒーそのものからウッディな香りが漂い、清々しさも感じる。

しかし、味がおいしいだけではない。このフェダール農園のコーヒーは、もともと国際市場価格よりも高い買取価格、つまりは、よりフェアな価格に基づいており、生産者にやさしいコーヒーとなっている。売り上げは全額、現地への支援に当てる予定だ。こうした形で持続可能な開発目標(SDGs)への取り組みの一助となればというのが、学生たちの考

えたこのコーヒーを作った狙いである。

このコーヒーの背景・ストーリーやそれに対する思いは、ゼミ生たちが作ったホームページ「神保町コーヒ

ープロジェクト」に書かれているので、ぜひご覧いただきたい(<https://jimbocho-coffee.com>)。学生たちはこのHPを作り、みんなで議論しながらロゴやコーヒーのラベルのデザインを作ってきた。

「そこにしかないもの」を大切に

明治大学SDGsコーヒーは、学生たちが神保町の街づくりを目指して進めている「神保町コーヒープロジェクト」の一環として始まった取り組みである。なぜ神保町の街づくりにコーヒーなのだろうか。神保町は古本屋の街である。しかし、アマゾンの台頭など、デジタル経済化の波は大きく押し寄せてきている。電子書籍化が進むのと同時に、古本もオンラインで購入されることが増えている。

このデジタル経済化の影響は当然、神保町だけにとどまるものではなく、世界中の都市のあり方に影響を与えている。東京、ニューヨーク、ロンドンなど、情報のハブとなった都市は金融や多国籍企業の司令塔としてグローバル都市になった。デジタル経済化の一つの特徴は、少ない司令塔で多くのことを管理できることである。そ



コロンビア・フェダール農園の人々と川島さん(左から4人目)＝川島氏提供

のため、中間の階層などを飛ばす「中抜き」が可能になる。都市においても、そうした中間的な工業都市であった地方都市は周縁化しており「勝ち組」「負け組」の差が明らかになってきている。

こうしたデジタル経済化が進む中で生き残るには、「そこにしかないもの」をどうやって提供できるかが重要になる。ゼミ生たちと神保町の古本屋のことを調べていくと、それこそがまさに神保町の強みであることも分かってきた。創業者が魯迅の庇護者であった中国専門の内山書店では中国でも手に入りにくい絶版書などが扱われているほか、北朝鮮やアジア関連の本の品揃えがすごい。韓国の書籍だけを集めた「チェッコリ」というブックカフェには、日本全国から多くの人がこの店を訪問するためだけに神保町にやってくる。つまりこの町は、日本のどこにもない、ここにしかないものの宝庫であるのだ。しかし、一方ではこれが弱点でもある。というのは、一つ一つの店は特色があるが、他の店が扱っているような本へのお客さんの関心は低く、広がり欠ける場合も多いからだ。

つながりを育む場所へ

そんな中でゼミ生たちと注目したのが、コーヒーだった。その第1の理由は、本屋との相乗効果である。古書店街の特色ある歴史を生かすには、やはり同じように神保町で歴史を持つコーヒーとの相乗効果があるのではないかと考え



学生がラベルをデザインした
明治大学SDGsコーヒー



島田ゼミ3年生

たからだ。また、神保町にはミカフェートなど新しいタイプの店も増えてきており、多様な楽しみ方を提供できるとも考えた。

第2には、都内の他の地域と比べても神保町には公園が少なく、人が回遊したり滞留したりするゆとりが少ない。そんな中、カフェが都市の中で安らげる場所になると考えられるからである。また、神保町には独特のにぎわいがあるが、カフェはそうした人と人とのつながり（ソーシャル・キャピタル）を育む場所になり得るからだ。前述したソーシャル・グッド・ロースターズなどはその代表的な例だろう。障がい者が技術と役割を持ち、そしてそこを訪問する人たちと新たな関係を作り上げていっている。

HPでは生産国の状況も発信

とはいえ、コロナ禍の中で学生ができることは限られている。そこでコロナ禍の状況が悪化しても続けられるように、神保町からコーヒーと生産国の状況を前述のホームページで発信していくことに

した。今回発売するコーヒーもこうした取り組みの一環であり、街づくりと現地の生産者の2つの課題に同時に取り組むことを意図している。

難しかったのは販売方法だ。学園祭もオンライン開催になり、学内の店も全て閉まっているからだ。幸いオンライン販売で扱っていただけることになった。こうして実現するまで、ゼミ生たちは実に多くの方々に協力をいただいた。誌面の関係でお名前を挙げることはできないのが残念だが本当に感謝をしている。

ぜひコーヒーを手にとっていただければ幸いである。コロンビア・フェダール農園で障がいを持ちながらコーヒー生産に取り組む人びとへの支援につながり、それが同時に日本国内の街づくりにもつながっているからである。

販売ホームページの
URLとQRコードは
こちら



<https://meidaigoods.net/>